
「あなたじゃなきゃ、だめなの」

佐藤ビー玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「あなたじやなきや、ダメなの」

【Zコード】

N8735A

【作者名】

佐藤ビーベ

【あらすじ】

あなたの笑顔が好き。陽気な性格が好き。優しい所が好き。勉強できない所が好き。かつこいい所が好き。ぜんぶ、好き。

第1話 . . . 「…すき。」

秋の訪れっていうのかな？

周りの木葉は赤とか薄黄色とか朱色とかにすっかり染まって、ひらひらと落ちてくるそれがまるで精霊さんみたいだ。

そんな可愛らしい事を考えている雪野ほのかは、自分が通っている山下高校の門の直前で足を止めた。

大勢の生徒に雑じつて一人だけ輝いている（ほのかにはそう見える）、「一年C組のクラスメイトで席が前後、柚原太一が目の中などびこんできたからだ。

誕生日は12月24日、身長は168センチ、勉強はまるでダメだけど体育は得意、好きな食べ物はハンバーグといなり寿司。そうなのだ。ほのかは太一に恋心を抱いていた。

あの短くて上に立てた髪形が好きだ。陽気な性格が好きだ。よく笑つてよく食べる所が好きだ。授業中寝ていて、その寝顔も好きだ。おどおどで常にぽーっととしているほのかだが、やる事はやっている。恋人だとかの話になると全然分からなのに、まだ実っていない恋の話となると興味がわく。自分から切り出したりはしないが。基本的に恥ずかしがり屋だから。

ほのかの身長は157センチで普通。スタイルも特別いい訳でもなく普通。髪形は肩下10センチ位のストレートヘアで、ただ頭がよく学年トップ。

頭脳以外では何の取り柄もないが、どうしようもなく太一が好きだつた。たまに挨拶する事もあるが別に仲が良い訳ではない。ただのクラスメイト止まりなのだ。

もっと近くなりたかった。心が。心が。

「えつ…これ、全部ですか？」

最後の授業が終わり帰る準備をしていて、びっくりしながら机の上に置かれたノートの束を指差す。束は三つあり、どう考へてもほのかの力では一度に全部は持つていけない。頑張つてもせいぜい二つくらいだ。

「そうだ、ごめんなあ…今日から野球部の遠征でさ、顧問だから俺早く行かなきや…つてすまん！もうバス来たみたいだから行くな！職員室まで頼んだぞ」

「あ…」

苦笑いしながら走り去ってしまったのは古典の教師だ。ほのかはよくお世話になつていいから、嫌ではなかつた。しかし量だけはどうにもならない。

「往復、するかなあ。

まだ生徒達の声で煩い教室の中、窓際の席ではあ、と溜め息をついた。

「ゆーきのっ」

顔を上げなくとも分かる。ほのかの顔は真つ赤になつた。

「…ゆ、柚原くん…」

「おうっ。お前、今からそれ職員室まで持つてくれんだ？」「ほのかは心臓をばくばくさせながら、俯いたまま頷く。

「じゃいっちょ手伝っちゃるか！」

よし、といふ声と共に、三つのノートの束のつか一つが中に浮く。ほのかが急いで顔を上げると、束を持って子供っぽく笑つている太一がいた。

「どうじょっ…。

泣きたい位嬉しい反面、緊張のあまり体が上手く動かせない。

「何やってんだよ？ほらほら行つちやうぞーっ」

太一がすたすた歩いて行つてしまつので、ほのかは残りの束を掴んで慌てて追い掛けた。

「そういえば、ゆきのと喋った事つてあんまなかつたよなー」
ドキドキが止まらない。憧れの人気がこんなに近くに、すぐ横を歩いてくるなんて今まであつただらうか。

「う、うん」

「ゆきのはさあ、頭よくてすうげえ尊敬してんだぜーおれなんてほら、ダメダメだからなつ」

そう言つて大声で笑う。ほのかは太一のそんな所も好きだつた。今思えば、好きになつたきつかけなんて本当に些細な事だつたのだ。太一がほのかのテストを見て、笑顔で褒めてくれた。ただそれだけの事だつた。それから太一の笑顔が好きになり、仕草が好きになり、今ではこんなに想つている。

「ゆーきーの一…何かフォローとかしてくんない訳?」

恨めしそうにほのかを見る太一に、慌てて答えた。

「そ、そんな事ないよ! 柚原くんはいつも楽しそうで、みんなの気分癒してくれてるつていうか…その」

太一にこんなに一気に喋つたのは初めてだつたので、身振り手振りでほのかはかなり拳動不審になつてしまつ。

そんなほのかを見て、目をぱちくりとさせた太一。

「あはははーゆきのって面白いんだなー。まあいつけどせ、さんきゅー」

あと、と付け加える。

「えーつ?ーそんな約束したのあいつとーそれで、その後何かあつたの?」

興味津々にほのかの顔を覗き込む涼子に、顔を赤くして首を横に振る。

あの翌日の朝。嬉しくて恥ずかしくてほのかはどうにかなつてしまふ。

いそうだ。

ほのかは涼子にだけ、太一への甘酸っぱい恋心を打ち明けていた。二人は高校入学からの友達だが、もうかなり仲良くなりお互いを信頼し合っていた。

後で知った事だが涼子と太一は幼なじみらしく、家族の様に接する二人が羨ましかった。

「なんだあ…って、おいおい！ 来たぞっ！」

涼子の視線を追うと、そこにはいつもと同じ太一がいて、教室に入ってきた。するとすぐにこちらを向いたと思ったら、近付いてこう言った。

「はよー、ゆきのっ。あと涼子」

「あとは余計よ！ ほらほのか、挨拶挨拶！」

涼子に促されて顔がさらに赤くなる。それでも掠れた声で一生懸命口を開いた。

「あ…あの、おはよう…た、太一くん」

「おうっ、おはよう…！」

ほのかの大好きな笑顔がすぐそこにある。

私って、なんて幸せ者なんだろう。

昨日、自分を名前で呼んでとは言えなかつた。まだ太一の中に踏み込むべきではないと思つたから。

それでもほのかは、少しでも太一に近付くことができてとても幸せだつた。

それが顔に出てしまい、太一が去つた後ほのかは満面の笑みで涼子を見上げ、そしてまた俯き何か呟いた。

これからも、こんな風に笑いたい。
好きな人と一緒にいたい。

純粹な少女の綺麗な想いだつた。

第2話 . . . 「寒くねーか？」

「柚は……じゃない、太一くん……教えて欲しいんだけど」「おうつ。……何を？」

「あの……携帯、番号とメール……」

「なんだそんな事かよー。ちょっと待ってくれな。赤外線ついてつか？」

「あ……うん、はい」

「……よしつと。じゃあメール送つてくれたゆきの登録すっからぐ。むやんと送れよ！無視したら絶交だからなー」「お、送るよ！」

「つふふー、冗談よお。んじやな、また明日つー！」

「ばいばい……」

「……んで、ラブライブいやんあはんメールしちゃった訳ね」

「な、何それ……違うよ、普通だよ」

またからかわれてる、と思いながらほのかは必死に否定する。

今は掃除時間なのでほのかは簞をせつせと動かし、涼子はにやにやしながら壁に寄り掛かっている。埃が舞うため窓は全て開けてあった。

「でもさ、あんた結構可愛いんだから太一もグリツくかもよ」ほのかは涼子のスタイル抜群な体と綺麗な顔を見て溜め息をついた。

「……そんな訳ないよ……だって太一くんは私の事、苗字で呼ぶもん」「……つあー忘れてた……」

「え……何が？」

ぽん、と両手を合わせて笑う涼子を不思議そうに見る。

「その、あいつがほのかを苗字で呼ぶって話。あたし昨日家帰つて

からスーパーへ行こうとして、親に晩ご飯のおかず買って来いって言われて。そしたら道で会ったのよ、あいつに！！そんで『何でほのかの事名前で呼んあげないの』って聞いたら、何て言つたと思う？！』

「え…なんだる。そこまで親しくないから、とか？」

ほのかがそう答えると、涼子は人差し指を立てて横に振る。

「ちつがうのよー、なんとね…『ゆきのつて名前みたいじゃん、だからおれはそれでいいの！それに苗字で呼ぶとなんか気持ちがふわふわすんだよなー』だあつてさー。このこのー」

そう言って涼子は、ほのかの赤く染まった頬をひっぱつた。完全に照れてんな、ほのかつてば可愛いの。

「でも太一、恋愛沙汰には疎いからねえ…重度の鈍感よ、あいつ」それはほのかにも何となく分かっていた。太一は女の子とは誰とでも喋るからよく悲しい思いをしていたし、今まで何回も眞面目なれてきたのに全部断つていたのを知っているから。

「片想いって大変だなあ…ねえ、涼子ちゃん」

「何言つてんのよ、ほらもー掃除終わりだし帰ろ帰ろー！」

強引に引っ張つていかれたほのかの頭の中は、太一の事でいっぱいだった。いつもの事だが。

「や、やっぱ帰るよー」

「ダメよ、もうすぐそこなんだかい。ほら、あの青い屋根の家つーのはしゃぎまくりの涼子はほのかを捕まえた腕を離さない。ずんずんと進んでいる。太一の自宅へと向かって。

「だつて迷惑だよきつとー…つて、ああー！」

ほのかの言葉は無視して涼子はベルを鳴らした。そしてほのかを見ると、何かを期待しているような顔でにやりと笑った。

「はーいはー……ゆきの？…と、涼子…」

「やほー太ーー」

ドアからひょっこりと顔を出した太一に、涼子は明るく声をかけた。
ほのかはする事がなく、恥ずかしさのため下を向いている。

「あのせ、ちよつとほのか預かつてくんない?」

「ん? それってどーいう事だ?」

「本当はあたし達ちょっと寄り道してく予定だつたんだけどさー、
また母さんに買い物頼まれちゃつて…でもほのかんち、七時におば
さん帰つて来るまで家開かないんだつて。だから三時間一緒にいて
あげてよー」

ほのかと涼子と一人で買い物に行けばいいのに、といつ考えは、ほ
のかの頭に浮かんでも太一の頭には浮かばなかつた。

「んん、そーなの? そーいう事なら全然OKだからあがつてけ!」

太一が手招きをすると涼子は腕をやつと離し、ほのかの背中を優しく押した。

「よかつたねほのか! んじゃ頼んだよー、またねつ」

邪魔者はさつさと退散、とほのかの耳元で囁くと、笑顔でどこかへ
行つてしまつた。

「あの…」

「ん?」

「ほのかの向かいに太一が座つたものだから、とつててコップに手を
伸ばして少し飲んだ。

「太一くんのお茶は、いいの?」

「いーよ、おれ今そんなに喉渴いてねーんだ

いつもの調子で笑う太一を見て、ほのかは首を振つて言つた。

「私だけ飲んでる悪いんだもん…」

「そんな事気にすんなよー」

「…これ、飲む？」

そう言つて、自分が持つてゐるコップを前にだす。所謂間接キスとかいうやつかな、とほのかはぼーっと考えていた。

「そーかあ？なら、ちょっとだけなあ…はい、さんきゅ」

ついつい太一の唇に目がいつてしまふ。太一がそれを飲んだのを見た時、急に恥ずかしくなつて俯いてしまつた。

「う、ごめんね！急に来たりして…」

「いーのいーの！ただちょっとびっくりしたけどなあ」

太一は笑顔で喋り続けた。ほのかは終始赤面していたが、確かに幸せだと思っていた。

「送つてまでしてくれて、ありがとうね…」

「いーって事よ！夜道は危ねえしなつ」

すっかり暗くなつてしまい、電灯がささやかに辺りを照らしているだけとなつた。そんな時太一はほのかを家まで送つていくと言つ出したのだ。太一の優しさ故の行動だった。

「寒くねーか？」

「ん…ちょっと、寒いかも…でもたぶん大丈夫」

「はは、どっちだよー」

太一の笑顔を見るに心が暖かくなる。もっともつと好きになる。その時、ほのかの右手をなにかが握つた。それが太一の手だと気付いた時にはパニックになつた。太一の顔を見上げたが、暗くてよく見えない。

「女の子は手を冷やしちゃダメなんだつて」

それはお腹…。

口にしてしまいそうになつて、直前で呑み込む。

初めて触れた、好きな人の手。それはとても暖かくて、うつとりしてしまふ程気持ちよかつた。

「…ありがとう」

「おうっ」

こんなに素敵なお人、他にいないよ。

近づく度に好きな所が増えていく。

もつと、もつと。

好きになりたいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8735a/>

「あなたじゃなきゃ、だめなの」

2010年10月11日18時16分発行